

## 越智貴雄写真展「感じるパラリンピック」開催

2月13日、区役所2階の区民ギャラリーでは、写真展「感じるパラリンピック」が始まりました。この写真展は、2000年シドニーパラリンピック大会以降に、報道カメラマンの越智貴雄さんが、障害者アスリートを撮影したもので、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の気運醸成とともに、障害とは何か？を問いかけています。展示は、2月23日までです。

越智貴雄さんとパラリンピックとの出会いは2000年のシドニー大会です。報道カメラマンとして、オリンピックの後に、パラリンピックの撮影の依頼を受けました。その当時は、パラリンピックにスポットライトが当たることはなく、越智さんも障害者のスポーツを撮影することに、不安と戸惑いを感じていました。

障害者というイメージが先行し、撮影することに不安や戸惑いを感じながら、会場に足を運びましたが、そこで繰り広げられる競技の質の高さと面白さに驚きと感動を覚え、無我夢中でシャッターを押したと言います。そこから、越智さんのライフワークにもなった国内外でのパラスポーツの撮影が始まりました。2013年の東京オリンピック・パラリンピック招致の最終プレゼンテーションに使われた佐藤真海選手の跳躍写真も越智さんの撮影によるものです。また、2014年には、写真集「切断のビーナス」を出版し、大きな話題となりました。

今回の写真展「感じるパラリンピック」は、2000年シドニーパラリンピック以降のパラリンピックや世界選手権など競技風景、さらに義足のアスリートが競技場を離れて見せるスナップ写真など40点ほどが展示されています。また、リオ2016パラリンピック100mと走り幅跳びに出場した大西瞳さんが、実際に競技で使った義足などを展示しています。

会場には障害者アスリートの言葉が、紹介されています。「はじめて車椅子に座ったとき、私にとってひとつの扉が閉じた。でもそれ以上に多くの扉が開いたんだ。」「しょうがいとは目に見えるものではなく、自分自身が作り出す限界や壁、すなわち心のしょうがいである。」こうした障害者アスリートとの交流を通して、越智さんは「障害とは何か」を訴えかけています。

写真展は初日から、多くの来場者で賑わいました。展示は23日までで、最終日の23日には、区内在住の大西瞳さんと越智貴雄さんのトークショーや越智貴雄さんのギャラリートークも開催されます。ギャラリートークは、1回目11:15～、2回目13:15～、トークショー12:10～です。観覧希望者は、オリンピック・パラリンピック連携推進担当まで連絡を。



### 【問い合わせ先】

区民生活部オリンピック・パラリンピック連携推進担当 03-3312-2111 内線 3774